伊勢物語

筒井筒　―現代語訳―

昔、地方を回って生計を立てていた人の子供たちが、井戸の周りに出て遊んでいたが、大人になってしまったので、男も女も恥ずかしがって（会わずに）いたけれど、男は、この女をぜひ妻にしようと思う。女は、この男を（夫にしよう）と思い続け、親が（他の男と）結婚させようとするけれども、聞かないでいた。そうして、この隣の男のもとから、このように（歌を贈ってきた）。

筒井筒…井戸の井筒の高さと背比べした私の背丈は、井筒を越してしまったらしいなあ、
あなたを見ない間に。

女は、返しの歌として、

くらべこし…（あなたと）長さを比べてきた振り分け髪も、肩より長くなってしまった。
あなたでなくて誰のために髪上げをしようか（あなた以外の人のためにはしない）。

などと詠み交しあって、とうとうかねてからの望みどおり結婚した。

そうして、数年たつうちに、女は、親に死なれ、生活のよりどころがなくなるにつれて、（男は、夫婦）そろって貧乏な状態でいられようか（いや、いられない）と思って、河内の国高安の郡に、通って行く所ができてしまった。そうではあったけれども、この昔からの女は、嫌だと思っている様子もなくて、（男を新しい女の所へ）出してやったので、男は、（女は）浮気心があってこのような態度をとるのであろうかと疑わしく思って、庭の植え込みの中に隠れていて、河内へ行ったふりをして見ていると、この女は、たいそうきれいに化粧をして、物思いにふけって、

風吹けば…風が吹くと沖の白波がたつ、というその名の龍田山を、あの人は夜中に一人で
越えているであろうか（どうかご無事で）。

と詠んだのを聞いて、（男は）このうえなくいとしいと思って、河内へも行かなくなってしまった。

ごくまれに、あの高安（河内の女の所）に来てみると、（その女は）初めのうちは奥ゆかしく身繕っていたが、今は気を許して、自分の手でしゃもじをとって、飯を盛る器に（飯を）よそっているのを見て、（男は）嫌になって、（女の所に）行かなくなってしまった。そうであったので、その女は、（男のいる）大和の方を見やって、

君があたり…あなたのいる（大和の）辺りを見続けて暮らしましょう。（大和との境の）生
駒山を、雲よ、隠してくれるな。たとえ雨が降ったとしても。

と詠んで外の方を見ていると、やっとのことで大和の男が「行こう。」と言った。喜んで待っていたが、度々（男が来ないまま）過ぎてしまったので、

君来むと…あなたが、行こうと言ったその夜ごとが、むなしく過ぎてしまったので、当てにしていないけれども、あなたのことを恋し続けて暮らしています。

と（女は）歌を詠んだけれども、男は、通ってこなくなってしまった。